

プレゼン修行拾遺録【第1回】 ミッフィーとベクトルマン

轟 眞市 物質・材料研究機構 光材料センター*
Shin-ichi TODOROKI

先日、知り合いが送ってくれた英文雑誌記事に、西洋人から見た日本人のプレゼンの特徴がまとめてあった。

- Lacks punch and a logical progression,
- Too many slides, data and graphics,
- with a jumble of font sizes, typefaces and colors
ごちゃまぜ
— Pernille Rudlin, *Nikkei Weekly* ('08/5/12)
<http://www.pernillerudlin.com/article.php?sid=83>

まったく同感である。Simple is best. 人前でプレゼン技術を説いている筆者としては、これらに該当しない様に毎回上映資料を準備しているが、こと色使いに関しては、12年間守りつづけているルールがある。

図を含めて原則4色しか使わない。原色を避け、落ち着いた色調となる赤青緑茶を選び、必要に応じて黄色と灰色を加える。

この6色、後から気がついたのだが、ブルーナカラーと良く似ている。子うさぎミッフィーの生みの親、オランダの絵本作家のディック・ブルーナ氏が使う配色である。筆者は、どのソフトウェアを使ってもほぼ同じ色が指定できる様にあらかじめ設定しておき、素材を組み合わせても統一感が失われない様に心がけている。

原色を避けたことが意図せぬ効果を生んでいたことを、プレゼン講座の聴講生から聞かされたこともある。日本人男性の20人にひとり、赤や緑の混じった特定の範囲の色を区別し難い視覚特性を持っているという。（「色盲の人にもわかるバリアフリープレ

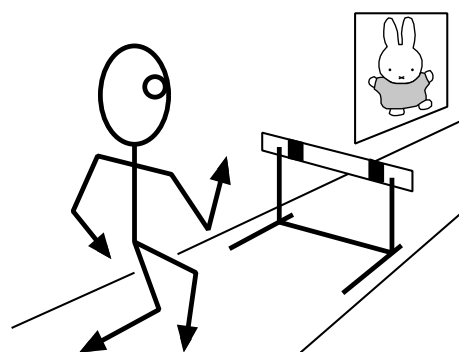


図1: 先にハードルありき。1999年11月、ベクトルマン誕生のきっかけ。

ゼンテーション法」<http://www.nig.ac.jp/color/> 参照) 私の選んだ色は、区別のし易い組み合わせになっているようだ。その当人から聞いたので間違いない。上映資料の実物をご覧になりたい方のために、最新作の[1]を紹介しておく。

もうひとつの下手なプレゼンの特徴

冒頭の箇条書きに指摘しきれしていない、悪いプレゼンの特徴がある。1枚の上映資料に書かれる文章が多すぎる点である。ここに含まれていないということは、日本人に限らない特徴なのかもしれない。

上映資料を埋めるのに、文章ほど作り手の「単位時間あたりの達成感」が大きいものは無い。伝えたい情報を、手間少なくして高密度に埋め込むことができる。しかしそれは、大きな落とし穴なのだ。

その上映資料を眺める聴衆の意識を想像すればわかる。彼らが理解することのできる「単位時間あたりの情報量」は限られているのだ。量で埋めるのは簡単だが、それでは左から右に流れていくだけだ。

*〒305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

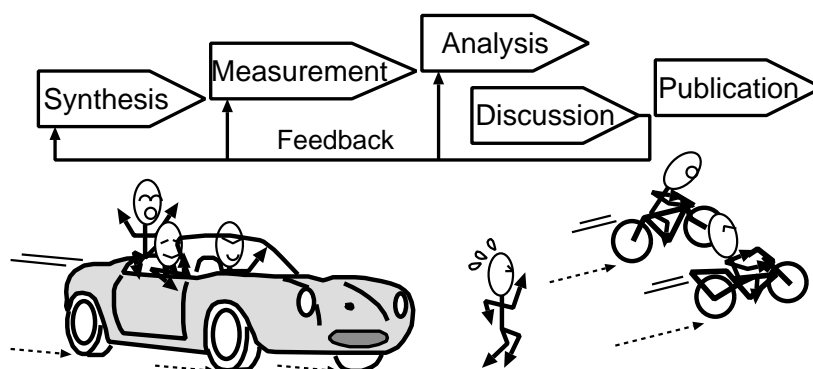


図 2: 天は自ら助くる者を助く。God helps him who helps himself.

短くとも印象に残る凝縮された表現を考えるのには時間がかかる。

オリジナルキャラクターの誕生

筆者の場合、1枚あたりの文章は原則5行以内とし、生じた余白には下手なイラストレーションで埋めておくことにしている [2]。しかし配置するからには、伝えたいことの本質を突く、一目でわかる絵を描くように心がけている。その過程で生まれてきたキャラクターが、後に研究者仲間から名前を授かった「ベクトルマン」である (図1参照)。

きっかけは、ある研究プロジェクトから提出を命じられたポンチ絵であった。各テーマが乗り越えるべき課題を図示せよ、という宿題に臨んで最初に思い浮かんだのは、陸上競技で使うハードルだった。それだけでは空白が目立つので、お絵描きソフトの単純な描画機能だけで人間を描いてみた。画面に動きが生まれ、下手であっても印象の残る絵になった。

描き慣れてくると、結構重宝することがわかってきた。顔の表情を付けられるので、文章よりも直感的に訴えたいことを表現できる。言語に依存しない表現なので、翻訳の必要も無い。

図2は米国で行った講演 [3] に用いたイラストである。上映資料の1枚目、演題の下に、左の赤いオープンカーだけを示し、「新しい共用研究装置を使う人達は皆その恩恵 (研究の加速) を得ることができる」と印象付けた。次の画面では図2全体を示し、「しかし、発表の段階になれば、個々人の情報管理能力がものを言う」と訴えたのである。

下手な英語にも関わらず、聴衆の注目を最後まで引きつけることができた。休み時間には、お褒めの言葉をいただいた。現代日本の誇れる文化のひとつは漫画やアニメなのであるから、その破壊力にあやかるとも戦略であろう。

上述した最新作 [1] にもベクトルマンを登場させ、確かな手応えを感じることができた。今回はそれを肴に、別の視点からプレゼン技術を論じてみたい。

[参考文献]

- [1] 轟 眞市：“研究者が使いたくなるリポジトリの機能とは？”，NIMS-DL フォーラム「デジタルライブラリーのその先に見えるもの」/ 学術情報オープンサミット (フォーラム 27-18), 横浜市 (2008).
- [2] 轟 眞市：“セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術 (3) 5 行ルール・文章より絵を”，工業材料, 55, 10, pp. 78-79 (2007).
- [3] S. Todoroki: “Blog-based research notebook for personal knowledge management and bottom-up knowledge sharing” (2005). CoSMIC-NIST workshop (Data Driven Material Research).

上記文献はすべてセルフアーカイビングされています。タイトルで検索してみてください。

プレゼン修行拾遺録【第2回】

バイリンガル・プレゼンテーション

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター*

Shin-ichi TODOROKI

こんな時、どの様なプレゼンテーションを準備すべきか？

聴衆のほとんどは日本人なのだが、海外から重要なゲストが出席しており、直前に彼らは英語で発表する(逐語通訳付き)。

よく見掛けるのは、和文上映資料に英訳を「ふりがな」の様に書き加えて、日本語で発表するケースだ。発表者にとってはお手軽だが、聴衆にとっては上映資料がごちゃごちゃして見にくくなる。外国人ならなおさらだ。それならば、と、ゲストの顔を立てて英語で発表すると、ついてこれない日本人が出てくる。

筆者は先日、この様な条件での講演をこなしてきた[1]。材料科学を離れたアウェイの場で、日本語で話したにも関わらず、双方に満足してもらえた手応えを得た。そのノウハウをここにまとめておく。

プレゼンに王道は無い

講演時間内にできることは限られている。普通にプレゼンテーションを行うだけでも、完璧を期するのは難しいのに、内容を削らずに二ヶ国語でメッセージを伝えるだけの余裕は無い。ならば、準備に時間を掛けるしかない。上映資料を日英二種類準備することにした。

発表は日本語で行うのだから、英語版は見るだけで話が追える様に作りこむ必要がある。独自の英語版を作るだけ時間は無いので、日本語版を単純に英訳するしかない。持てるノウハウのすべてを採り入れて、見るだけで理解できる日本語版[1]を完成さ

せた。「結論は3行で」、「5行ルール」、「文章より絵を」、「等々。その詳細は既に別の連載記事[2]にまとめてある。

特に力を入れたのはイラストである。発表の中で言及する三者(研究者、図書館員、システム開発者)の関係を端的に把握できる様に、イラストを散りばめた(図1参照)。この三者の関係を文章で説明しようとする、と、たちまち「5行ルール」(上映資料1枚に書く文章の上限)に反してしまう。イラストの力を借りるべく、研究者達がまたがる「馬」と図書館員がぶら下げている「ニンジン」、そしてその背後に控えるシステム開発者の姿で、彼らの関係を暗示した。

続いて英訳[3]に取り組んだのだが、思いのほか苦勞した。同じスペースに盛りこめる内容は、日本語の方が漢字が使える分遙かに大きい。しかし、手塩にかけたイラストが意味を補完してくれる。類語辞典を引きまくって、コンパクトな英文を捻り出し、埋めていった。

杉田敏氏から学んだこと

筆者が大学生であった頃から、NHK ラジオ「やさしいビジネス英語」で講師を担当していた杉田敏氏[†]の本業はPR業であり、氏のプレゼンテーション技術に関する著作からは、さまざまなことを吸収した。その中でも、「説得の三つの要素は『エトス』『パトス』『ロゴス』」[4]は、筆者の身に付けたプレゼン技術の根底をなすものである。もともとは、ギリシャの哲学者アリストテレスが唱えたことで、今回のプレゼンテーションの例に当てはめて読み替えると、エトスは前評判や期待、パトスは熱意、ロゴスは論理となる。

[†]<http://www.ethospathoslogos.com/>

*〒305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

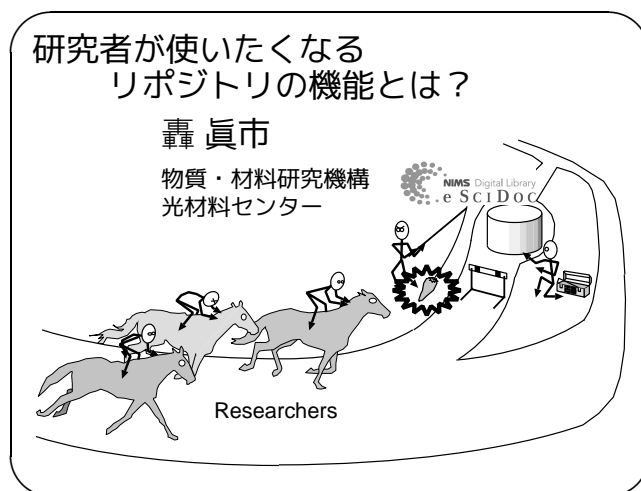


図 1: 講演 [1] で用いた上映資料の 1 枚目。前回の連載で紹介したベクトルマンを登場させた。

ロゴスは、綿密に準備した上映資料が支えてくれる。しかし、図書館業界では無名な筆者のエトスは零である。しかしセッション開始直前、プロジェクタのテストとして上映したイラスト付きタイトル(図 1)が、筆者のエトスを高めてくれた。

This is a very nice slide!

講師の一人が発した言葉が筆者の耳に届いた。こちらを振り返った彼に、親指を立てたサインで応えた。

彼らの講演が終わり、筆者の番になった。日英 2 種類の上映資料を併映しつつ日本語で話す筆者は、彼らの反応を確認するだけの余裕は無かったのだが、後から好意的なコメントをもらった。

「同僚にこの上映資料を回覧する。」
「欧州に来たら立ち寄ってくれ。歓迎する。」

日本人のひとりからは、意外なコメントを頂いた。

「威圧的でないことが新鮮だ」

筆者の様な職に就いている人間のエトスに、「威圧的」という要素がある、ということだ。それを、パトスで塗り替えることができた、と解釈した。

杉田氏曰く、プレゼンテーションの目的は人を動かすこと。この講演がきっかけとなって、執筆や講演の依頼を受けることとなったのだから、合格点に

は達しているのだろう。その日のうちに機関リポジトリで公開した上映資料も、その後 30 件近くダウンロードされたことが確認できた。

最後に、この講演を企画し、サポートして頂いた NIMS 科学情報室の面々に感謝します。

[参考文献]

- [1] 轟真市：“研究者が使いたくなるリポジトリの機能とは？”，NIMS-DL フォーラム「デジタルライブラリーのその先に見えるもの」/ 学術情報オープンサミット(フォーラム 27-18), 横浜市 (2008).
- [2] 轟真市：“セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術(連載全 6 回)”，工業材料, 55, 8～翌 3 月号 (2007～2008).
- [3] S. Todoroki: “How we pave the way of NIMS eSciDoc? –a user’s opinion”, The 2008 Scientific Information Open Summit: Forum 27-18, Yokohama, JAPAN (2008).
- [4] 杉田 敏：“人を動かす！話す技術”，PHP 研究所 (2002). ISBN 4-569-62287-9 (PHP 新書 212).

上記の筆者による文献はすべてセルフアーカイビングされています。タイトルで検索してみてください。

プレゼン修行拾遺録【第3回】

スバ シーバ
Merci, 謝謝, Спасибо

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター*

Shin-ichi TODOROKI

来日している外国人が日本語をカタコトでも喋れることが分かったと、がぜん親近感が湧くのと同様、外国でのプレゼンテーションの冒頭に現地語（ただし、英語以外）で短いスピーチをすると、聴衆の興味を一気に引きつけることができる。特に、聴衆が講演者のことを良く知らない想定される場合には効果的である。筆者は英語もまともに喋れないくせに、外国語をかじることには興味がある。たとえば下手の横好きであっても、仕事のため国際交流のためとあらば、忙しい準備の間の現実逃避にも大義名分が立つ。現地でのちょっとした交流に役立つこともある。旅先で掻き捨ててきた恥の話にお付き合い願いたい。

2001年春のフランス

突然に出張の話が振られてきた。同室のフランス人ポスドクの仲介で、単身ポルドー大学とレンヌ大学を訪問することになり、そこで研究内容を話すことになった。準備の時間は三週間だけだったが、フランス語のわか勉強を始めるとともに、彼女に短い挨拶文を考えてもらった。

筆者の世代の人間は、大学までの語学の勉強といえば、ノートに手書きで例文を書き写すことが基本であった。その後、パソコンが文房具の様な存在になって初めての語学の勉強である。まずは、フランス語のファイルの読み書きと印刷をLinux PCで行う方法を習得した。費す労力の大半がこれなのだから、本末転倒と云われても仕方がない。しかし、勉強に道楽を結びつけるのは良い戦略である。

*〒 305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

Merci beaucoup, Monsieur Le Flem (Monsieur le professeur Lucas), pour cette présentation.

Je vous remercie beaucoup pour votre hospitalité et c'est avec un grand plaisir que je vais vous présenter mes récents travaux réalisés au NIRIM.

Comme j'apprends le français depuis seulement trois semaines, je vais continuer ma présentation en anglais, si vous le voulez bien.

図 1: フランス語による挨拶の原稿。

図 1 に示すわずか 3 文の挨拶なのだが、文法を理解し、綴りだけを見て発音できる様になるには結構でこずった。彼女に発音をチェックしてもらったのは、出発直前の一度きりだった。

20 名弱の聴衆の前で、原稿にはなるべく視線を落とさない様にして喋り終えると、暖かな拍手が返ってきた。母国語以外でコミュニケーションしなければならぬ者同士の連帯を勝手に感じながら、発表を続けた。

2002 年秋の上海

今度は国際シンポジウムでの招待講演であったが、中国語は十代のころ一ヶ月だけかじったこともあり、例の如くにわか仕込みで出発した。空港で迎えてくれた 2 人の若い博士達と共にタクシーに乗り込み、ひとしきり話をしたら、渋滞につかまってしまった。それならば、と挨拶原稿を取り出し、音読して発音のチェックを受けた。

翌日の午前中のセッションは朝 8 時から始まり、筆者の出番は 9 番目だった。1 回の休憩を挟んだも

連載

dà jiā_hǎo wǒ/hěn gāo xìng jīn_tīan 大家好! 我很高兴 今天	wǒ_shì dì yī_cì lái zhōng guó 我是 第一次 来 中国。
néng yǒu jī_huì zài zhè li yǎn/ jiǎng 能 有机会 在 这里 演 讲。	wǒ/ sǒu_huì de zhōng guó_huà zhǐ/ yǒu zhè xiē 我 所 会 的 中 国 话 只 有 这 些。
gǎn xiè gān fú/xǐ jiào_shòu jiào_shòu 感 谢 干 福 焘 教 授 平 尾 一 之 教 授	cóng xiàn zài kāi_shǐ wǒ yòng yīng yǔ yǎn/ jiǎng 从 现 在 开 始 我 用 英 语 演 讲。
hé dà_huì zǔ zhī zhě gěi/ wǒ zhè gè jī_huì 和 大 会 组 织 者 给 我 这 个 机 会。	

図 2: 中国語による挨拶の原稿。

の、時刻は正午近く。聴衆は空腹と疲れを感じている頃であった。登壇して威勢良く最初の一文を発すると(図2参照)、その直後に万雷の拍手を浴びた。会場の半数以上を占める百人以上の中国人からのものだった。勢いをもらった筆者は気持ちよく講演を進めることが出来た。翌日のパンケットでは、例の若い博士達が声を掛けてきて、肩を組んで一緒に写真を撮った。市内観光では話も弾んだし、何かと気を配ってくれた。

2005年春のサンクトペテルブルク

ここまで来ると半分意地になってくる。大きな国際会議の中の小さなシンポジウムに招かれたので、ロシア語は全く心得がなかったけれども、覚悟を決めた。見慣れないキリル文字を、発音とともに覚えるのは苦勞した。なんせ、“C”は英語のSに相当するし、“H”はN、“P”はRなのだから。

原稿をタイプし清書しても、なかなか読める様にならない(図3参照)。あらかじめ発音をチェックしてもらおう機会も逃してしまった。現地に乗っ込んでからは、毎日ノートに書き写し、音読をした。開会式での来賓挨拶の冒頭が聞き取れたことで、少し自信がついてきた。本番2日前にしてようやくスラスラと喋れるようになった。身体を使って覚えることの重要性を今更ながら認識した。

その日の市内観光でお土産を物色していると、ひとなつっこい若い店員が声を掛けてきた。彼は大阪に1年半滞在したことがあり、妻は日本人だという。この機会を逃すまいと、その場で練習に付き合ってもらった。別の若い女の店員が面白がって寄ってきた。関西弁を喋るロシア人青年に向かって、日本人

Уважаемый председатель, Сергей
Иванович, Дамы и господа
Я благодарю вас / за эту замечательную
возможность / выступить перед вами
на этом симпозиуме / в культурной столице
России, городе Санкт-Петербург.
Пока это всё, что я могу сказать по-
русски. Спасибо.

図 3: ロシア語による挨拶の原稿。

のおじさんが場違いなロシア語を話しているのだから無理もない。

本番での聴衆はわずか10人程で拍子抜けしてしまっただが、無事に拍手を頂戴して勤めを果たすことが出来た。

言葉の壁ごしに垣間見えるモノ

数年ぶりに挨拶原稿を眺めてみると、すっかり忘れ去っていることに気づく。それでも、あの努力が無駄になったとは思わない。やむをえず英語でコミュニケーションしなければならぬ者たちの間には、ぶ厚い壁が立ち塞がっている。英語よりも伝わり易い言葉の力を借りて、僅かでも心を通わすことが出来れば、その直後から、双方の英語運用能力にアクセルが掛かるのだ。

最後に各国語の挨拶原稿を作成していただいた、Dr. Virginie Nazabal, Dr. Chu Songzhu (諸松竹), 及び Dr. Dmitry A. Kukuruznyak (Дмитрий Анатольевич) に感謝の意を表す。

プレゼン修行拾遺録【第4回】

我、如何にして人に口頭発表術を説くに至りしか

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター*

Shin-ichi TODOROKI

筆者は年に一回、プレゼンテーション技術の講義を学会会員向けに行っている。去年のこと、筆者よりも少しだけ年上とお見受けする聴講者から質問を受けた。講義の中で、外国人から見た日本人のプレゼンの特徴[†]に触れたことに対するコメントだった。

20年以上前から日本人のプレゼン下手は指摘されていたのに何故改善されないのか？

確かに筆者にも覚えがある。学生時代から耳にしていたことだ。それに対する一般的な回答は、学校教育にプレゼンテーション技術が組み込まれていないから、であろう。でもそれを口にしたところで、何の解決にもならない。あえて、本音を申し上げた。

我々がその改善のための努力をしてこなかったからだと思います。

学校教育を変える努力のことではない。まず、自分自身のプレゼンテーション技術を高める努力をしなければ、後進を導くことは出来ないはずだ。「うちのボスは、言ってる事とやってる事がちぐはぐだ」と思われてしまえば、やがて彼らのひどいプレゼンに頭を抱えることになる。

はじめに志ありき

「これであなたも明日からプレゼンの達人！」なんて旨い話は無い。それは分かっているにしても、忙しい仕事の合間を縫って、なんとか短期間のうちに上達する方法は無いだろうか？

残念ながら、そういう発想を持つこと自体、最初からボタンを掛け違えている。純粋に「プレゼンが上手になりたい」と願う自発的な動機が無い限り、プレゼンを上達させるための時間を見出すことは出来ない。永遠に優先順位が低いまま終わるのだ。

ではどうすれば、その自発的な動機をもつことが出来るのか？「あのみたいになりたい」という憧れが一番健全である。例えば、野球少年なら「イチロー」、クラシック音楽少女なら「村治佳織」。では、読者の方々が身を置かれている業界では誰がプレゼンの達人として思い浮かぶだろうか？

筆者の場合はもっと屈折した動機だった。自分のプレゼンのお粗末さを思い知ったのである。社会人になって2年が過ぎる頃、外国人講師によるプレゼンテーション研修に丸2日参加した。自分の弱点が客観的に晒け出され、改善のための方法論を学んだ。

それからのこと、退屈なプレゼンに遭遇すると、その内容はそっちのけで、どうすれば改善できるかを考えるようになった。しかし、その気づいた点を本人に進言するのは、ためらわれる場合がほとんどだった。このことは、恐ろしい現実を示唆している。自分が年齢を重ねる程に、自分のプレゼンの不備を指摘してくれる人は居なくなるのだ。「裸の王様にはなりたくない。」これが筆者の自発的な動機である。

覚悟を決めれば道は開かれる

自発的な動機が備われば、プレゼン技術向上のためなら余計に時間を割くことも厭わなくなる。筆者が学んだ方法論は、上映資料の構成方法に特徴があり、それを忠実に実行すると、今まで以上に準備に時間の掛かるものだった。何とか手間を省こうと、自

*〒 305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/
[†]連載第1回でも取り上げた。

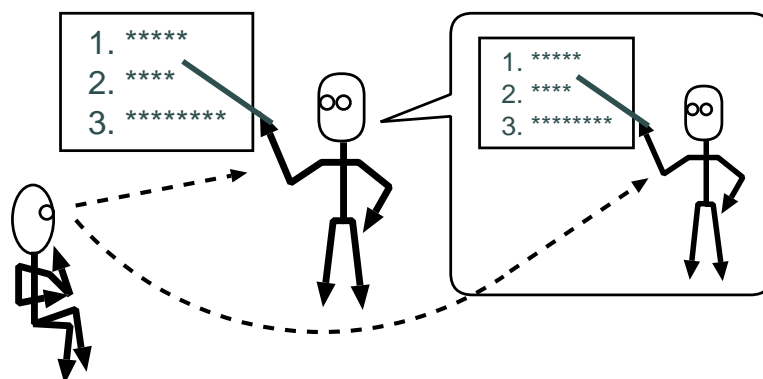


図 1: プレゼンテーション技術を教えるプレゼンテーション。言行一致が求められる厳しい機会。

分の趣味であるプログラミングが利用できるソフトウェアで上映資料を作る様になった。

最初に結論をわずか 3 行でまとめることから始めるこの方法論 [1] は、全体を鳥瞰しつつ細部を整えていけるので、準備の見通しが立て易いし、話を聞く方もわかり易い。しかしながら、3 行でまとめる作業が一番時間が掛かる。いや正確に言えば、満足な達成感を得るのに必要な時間が他の作業より長く感じる。話の印象を左右する極めて文学的な作業であり、産みの苦しみを伴うのだ。しかし、これを続けていくうちに、「君の話は分かり易い」と褒められる様になり、それが励みとなって更に磨きを掛けるようになった。

その後、上映資料の作り方を記事にまとめる依頼が舞い込み [2]、それがきっかけとなって、冒頭で述べた講義を受け持つようになった。プレゼンテーション研修を受けてから 6 年経った頃のことであった。

教えることは学ぶこと

教えるためには、教える以上に多くの内容を理解し、それを消化して自分なりの体系を構築せねばならない。それに加えて、プレゼンテーション技術を講義をする、ということは「言っていることとやっていることが一致する」ことを要求される気の抜けない仕事なのである (図 1 参照)。そしてそれは講義を離れた場でも付きまとう。どこに受講生の目があるかわからないので、気の抜けた発表は出来ない。これほど厳しい修行の機会はあるものではない。

世の中には、プレゼン技術の伝授を商売にしてい

る方も居られる訳で、その方たちの目を通せば筆者のプレゼンはまだまだ改善の余地があると思う。それでも、筆者の存在価値は、「現役の研究者でもこの程度のプレゼンはこなせる」、と世に示すことだろう。後進の方々の憧れの的になるにはまだまだ心許ないが、こういう人がもっと増えて欲しいと思う。

その後、プレゼンテーション技術の講義で出会った縁で、ある大学の学生向けに年 1 回講義を受け持つことになり、さらに修行の機会は増えた。最近になって、その受講者が学会等で賞をもらった、という話が舞い込むようになった。ご本人と指導教官の努力の賜物であるが、背中を押すきっかけに関わったのは嬉しいことである。

[参考文献]

- [1] 轟 眞市：“セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術 (連載全 6 回)”，工業材料, 55, 8~ 翌 3 月号 (2007~2008).
- [2] 轟 眞市：“分かりやすい発表は良い OHP シートづくりから”，セラミックス, 35, 8, pp. 656-660 (2000).

上記筆者の文献はすべてセルフアーカイビングされています。タイトルで検索してみてください。

プレゼン修行拾遺録【第5回】

四十四の手習い

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター*

Shin-ichi TODOROKI

14年ぶりにプレゼンテーションセミナー(職場内開催)を受講してきた。週3日を2回、のべ34時間を費やし、英語のみの環境で、プレゼンの構成法から質疑応答対策まで、実技中心の充実したセミナーだった。米国人男性と日本人女性の講師がペアとなって、テキストを用いずに、受講生の理解度に合わせてその場で組み立てていくカリキュラムは、無駄無く達成感が得られる素晴らしいものだった。この機会から筆者が感じたこと、学びとったことから3つほど紹介したい。

道具は変わっても原則は変わらない

以前に受講したにも関わらず、なぜ今回貴重な時間を費やすことに踏み切ったのか?それは、必ず更に何か得られるものがあるはず、と信じていたからであるし、事実得ることができた。

前回の最大の収穫は、わかりやすい上映資料の構成方法だった。当時、口頭発表と言えばOHP(overhead projector)を使うのが当然だったし、カラープリンタも研究所に1台しか備えられていなかった。また、一度作成したOHPフィルムは使い回すのが当たり前だった。フィルム代やコピー代が高価だった時代の習慣が残っていたのである。

そんな中、講演ごとに、話の流れを目に見える形で埋め込んだ上映資料を作り直すことを勧める方法論[†]に接したのは、目から鱗が落ちた、と言うしかない経験だった。話を聞く立場で考えれば、その方が断然分かりやすいからである。

*〒305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060

URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

[†]このノウハウを筆者流にまとめ直したものを、「論理構造の視覚化」と名づけて発表している [1]。

ちなみに、この方法論は今でも活きている。プレゼンテーションソフトが普及し、講演ごとにファイルを作るようにはなったが、話の流れを埋め込んである上映資料を目にする機会はそう多くない。専用の道具を使っても、それが即良い上映資料の作成に繋がるわけではない。執筆者があるべき上映資料の姿を認識しない限り、どんな道具を使っても凡庸なものしかできてこない。

非言語表現の大切さ

これが今回の収穫の一つである。前回でも学んではいた事柄だが、今回は実技をみっちり仕込まれた。非言語表現と聞いて、何を思い浮かべられるだろうか?アイコンタクト、ジェスチャー、あるいはボディ・ランゲージ。これらを行う意味は、メッセージに分かり易さを付加するためだけではない。再び目から鱗が落ちたのだが、非言語表現を併用すると、話すスピードが適度に抑えられ、その分抑揚が付くので、自動的に聞きやすい話し方になるのだ。すると、聴衆の側にも、聞いた内容を咀嚼するだけの余裕が生じる。

翻って思い起こすに、言葉だけに頼ったプレゼンテーションが如何に多いことか。英語の発表に不慣れな新人は、覚えてきた文章を間違えまいとひたすらしゃべり続ける。手慣れた演者は、時間内にできるだけ多くの内容を伝えようと喋りまくる。筆者にとっても耳の痛い話だ。

言語表現は講演者にとって大きな落とし穴だ。話したことや、上映資料に書き込んだことは、すべて伝わっている、と思っではいけない。口頭発表の場では、言葉を尽くした説明よりも、本質を切り取っ

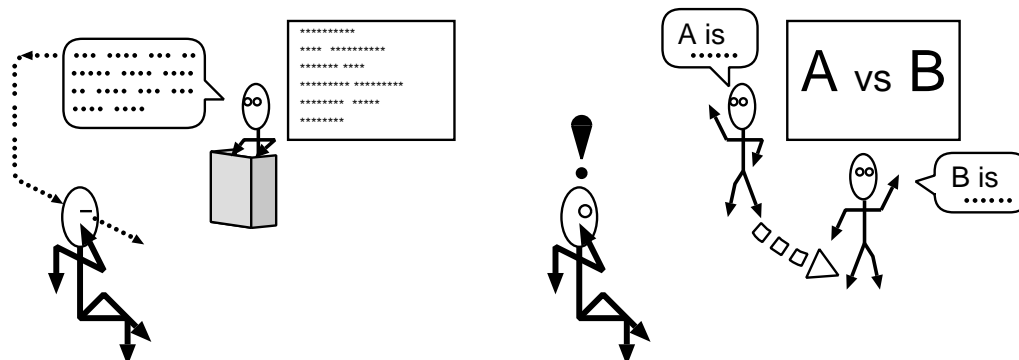


図 1: 言語表現だけに頼ったプレゼンテーションと、非言語表現を併用したプレゼンテーション。

たフレーズや一枚の絵の方が伝わり易いし、聴衆もそれを望んでいる (図 1)。

理想的な発表とは、簡潔な上映資料に、落ち着いた話し方が調和したものであろう。ここでも、あるべき口頭発表の姿を認識することが重要で、それに向かって練習や場数を重ねていくしかない。

研究者プロトコル

これは「研究者の間でしか通じない語彙や表現」のことを指す、皮肉が込められた表現である。セミナーの最中に筆者がこれを意識したのは、発表の構成の説明を受けている時だった。

発表は、序論、本論、結論の 3 部からなり、序論の構成は以下の様になる。

挨拶 Who am I?

題目 What am I going to talk about?

意義 Why should the audience listen to me?

概要 How will I give the information?

この時、受講生から質問が出た。「一般的な研究発表では、背景と称してこれまでの研究のあらましを述べるのだが、それが入っていない。」その場で少し議論した結果、「背景」を一般化したものが「意義」となることで落ち着いた。つまり、「意義」とは聴衆によって変わるべきものなのである。研究者に向かって話をするなら、講演者の研究のオリジナリティを明確にするために、背景を説明するのが暗黙のルールである。しかし、例えば投機資本家を相手にそん

な話をして、鼻であしらわれるだけだ。その研究成果で世界がどう動くかを描くことが先決である。

講師の側も、この認識は新鮮だった様だ。普段身を置く世界から離れてプレゼンテーションを行う時には、特に注意すべきポイントだろう。聴衆に取っての講演者の価値は何か、を常に自問しなければならない。

学ぶに遅すぎるということはない

人間、学んだモノが身につくのは、強い動機があった時だけ、と言えるだろう。ならば、プレゼンテーション技術を向上させたい、という動機さえ芽生えれば、年齢は関係ない。本稿あるいは本連載が読者の方々の肩を押すことに繋がれば幸いである。

最後に、刺激的な体験を与えてくださった Gary E. Vierheller 氏と Sachiyo Vierheller 氏、またこの企画を進めて頂いた関係者の方々に感謝申し上げます。

[参考文献]

- [1] 轟 眞市:“セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術(連載全 6 回)”, 工業材料, 55, 8~ 翌 3 月号 (2007~2008).

プレゼン修行拾遺録【第6回】 発表練習の効果を侮るなかれ

轟 眞市 物質・材料研究機構 光材料センター*
Shin-ichi TODOROKI

口頭発表の経験を積んだ中堅どころになってくると、発表練習の時間を取らずにいきなり本番に望む人が多いのでは無いだろうか？筆者もその一人だったのだが、先日、発表練習をせざるを得ない仕事が舞い込んだ。45分の講演をビデオに収録し、インターネットで公開するというのだ。

日頃、偉そうにプレゼン技術を人に説いてきた報いを受ける時が来たのだ。ぶざまなプレゼンを記録に残すわけにはいかない。講演1週間前から、夕方になると会議室に籠もり、内側から鍵をかけ、通し稽古を1回だけ行う日々を過ごした。この経験から見えてきたことを書き留めておく。

伝えたい事は多々あれど、、、

今までの経験から、上映資料の分量はこれ位、と見当はつけられる。しかしながら、聴衆のバックグラウンドをよくよく考えると、これだけは言っておきたいという内容が次々と浮かんでくる。膨れ上がった60枚のスライドを前に、最初の通し稽古に臨んだ。

結果はきっかり45分。しかし流れが悪く、しばしば口ごもってしまう。色気を出して、スライドに記さなかったことを補足しようとするのが裏目に出るのだ。ロスした時間を挽回しようと、口調は早くなり、余裕が無くなる。この状態を録画されるのはもったのほかだ。毎日練習する事を決意した。

今は亡き、桂枝雀師匠の速記本 [1] に記されていたエピソードを思い出す。

枝雀さんはお風呂に入ると、必ずこの講談の一節を口ずさんでいました。

*〒305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060
URL: http://www.geocities.jp/tokyo_1406/

「こういうもんは、毎日口に慣らしておいて、ほかのことを考えていても口から勝手に出てくるようにしてますねん」

.....「お稽古好き」の枝雀さんらしいコメントです。 — 『くしゃみ講釈』

通勤の行き帰りや寝床の中でも、無意識にさらう様になった。

練習によって研ぎ澄まされるもの

2回目も時間丁度で終え、流れも少し良くなった。しかし3回目の途中、突然先が続けられなくなった。グラフを使って細かい分析をする場面だった。「ダレる(=飽きてくる)」のだ。2回の通し稽古で全体の流れを身体で覚えた身には、わざわざ言葉を尽くして説明すべき内容に思えなくなってきたのだ。これは、上映資料執筆時には見えなかったことである。

言うまでもないことだが、黙読するより口演する方が時間がかかる(図1)。練習を重ねていくと、口演にかかるコストを最小にしようとして、自然に簡潔な表現を選ぶようになる。例の場面ではそれが絶望的に不可能に思え、敢えて言葉を重ねて伝えても聴衆が得るものは少ないと悟ったのだ。

主催者に上映資料を提出する締切りの前日であったのが幸이었다。急遽その部分を削除し、入れ替える内容を書き起こした。

余裕を得るのが最大の目的

前回の連載記事 [2] で述べたように、わかりやすい発表にするためには非言語表現を併用するのが良い。しかし、練習なしで本番に臨むと、時間内に終わら

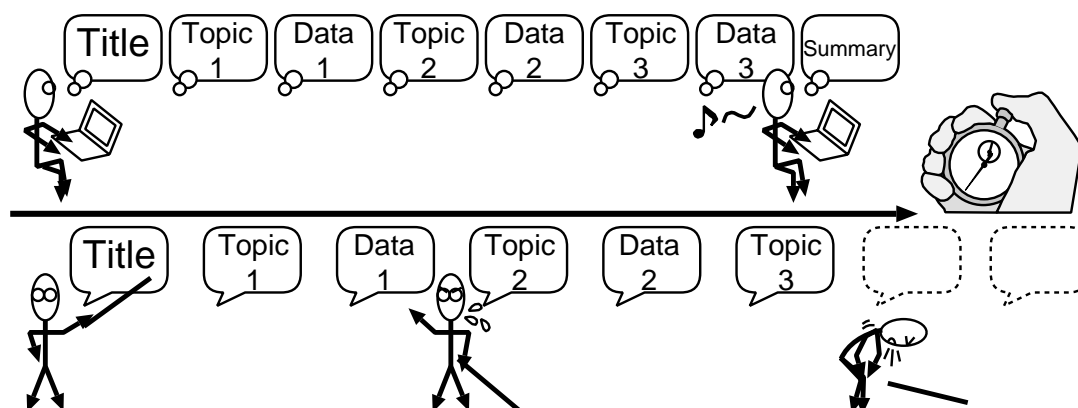


図 1: 練習に要する時間は、黙読より口演の方が長い。

せることが最優先になってしまい、アイコンタクトやジェスチャーを取り入れる余裕がなくなる。非言語表現を活用するためには、それに気が回る境地に達するまでの練習が必要なのだ。再び枝雀師匠の言葉が思い浮かぶ。

発表前日に 4 回目の通し稽古を行った。不思議な事に、簡潔な表現で喋っているのに 45 分きっかりで終わった。話すスピードがゆっくりになり、少しは非言語表現を試みる余裕が出てきたのだ。スライドを送るリモコン付きレーザーポインタの操作にも慣れてきた。

この他にも 4 回の練習を通じて試みたことがある。PC やプロジェクタの不具合に遭遇した時に備えて、毎回機材の組み合わせを変えて練習した。当日になって持参した PC が使えないことが分かったり、準備したビデオが上映不能だったりでは、目も当てられない。考えうる限りの事態に備えた対策を講じた。

そして当日

早めに会場入りし、もう一人の登壇者に挨拶を済ませ機材の動作確認をした。会場にはプロ仕様のビデオカメラが据えてある。主催者の意気込みが感じられた。早速カメラマンに質問をして、望ましい立ち位置を頭に入れた。

詰め掛けた聴衆は定員一杯の 80 名。休憩の後に登壇し、昨日の調子でこなせた様に思ったのだが、知り合いによれば、いつもより緊張していたそうだ。果たしてどんな姿で録画されたのであろうか？本稿

が出版される頃には、ネットで公開されていることであろう。ご視聴いただくと幸いです。

第 1 回 SPARC Japan セミナー 2009

「研究者は発信する - 多様な情報手段を用い、社会への拡がりを求めて」

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2009/20090625.html>

こんなにも練習にのめり込んだのはもう一つ理由がある。実はこのあと、日を置かずに 2 回ほどプレゼンテーションセミナーの講師を勤めたのだ。受講生の前で、練習した講演の前半を「口頭発表デモンストレーション」として見てもらった。研究の過程で遭遇したセレンディピティのエピソード [3] を一般向けに紹介する内容である。大学の 2 年生には少し難しい内容ではあったが、言葉を噛み砕いて伝える余裕があった。事前に「今年の 2 年生は無反応」と聞かされていたのだが、最後に拍手をしてもらえたのだから、彼らの心に何か伝わるものがあったのだろう。

[参考文献]

- [1] 桂 枝雀：“爆笑コレクション I”，ちくま文庫，筑摩書房 (2005).
- [2] 轟 眞市：“プレゼン修行拾遺録 (5) 四十四の手習い”，マテリアルインテグレーション, 22, 5, pp. 77-78 (2009).
- [3] 轟 眞市：“偶然を呼び寄せてセレンディピティを発揮するには”，応用物理, 78, 7, pp. 668-671 (2009).